

「サンデー毎日」の楽しみを超えて

山梨大学名誉教授 工学博士 伊藤 洋

人生設計値と現実との間に少なからぬ誤差が生じて、時ならぬ時期に大学を退官する羽目に陥った。生来が怠け者だから、これで夢にまで見た「サンデー毎日」やら「晴耕雨読」が楽しめるかと思っただが、それは少し早とちりだったようだ。暇になったのだからあれをやれこれをやれと言われて、思ったように毎日がサンデーにならないのである。中でも、「暇にさせておいては困るから」という理由で、親切にも？非営利活動法人（NPO）を作ってくれて、有無を言わず理事長にさせられる、などという例もでてきた。

ところで、昨年の年初時分から県内の景気も多少立ち直ったと言われている。身辺を見渡しても、たしかにデジタル家電やユビキタスなどに関係するプラズマディスプレイや電子部品、高集積度加工組み立て産業、半導体製造とその周辺産業などには活気がみなぎっている。しかし、これらと無縁な産業分野では相変わらず冷たい構造的不況風が吹いている。それゆえ、好況産業の立地している地域とそうでない地域の間には格差が生じて、全体として県内はぶち猫のようにまだらの景況を呈している。加えて、イラク情勢の泥沼化、アメリカの財政赤字に原油価格の高騰等々、2005年春から夏への県内景気の先行きに不安材料はたつぷりある。

そもそも、この国で疾風怒濤の経済成長を可能とする時代はとくに過ぎ去った。我々は今、二十世紀前半の英国や、第二次大戦後のヨーロッパ、一九八〇年代のアメリカなど、近代国家が歩んだ歴史的経路を忠実になぞっている。つまり「先進国病」という成功者が必ずかかる病に冒されているのである。こうなってみると、あのシュツルム・ウント・ドラックの60年代が懐かしい。それだけに、隣国中国の天をも突くかと思われる急成長が羨ましく、激しく嫉妬を掻き立てられる。

資本主義社会が、成長を遂げて後になお成長するためにには技術革新が必要だと説いたのはシュンペーターだが、その技術革新さえも成長後の世界では限定的であって、打ち出の小槌を持ってなどいない。

しかし、アメリカの90年代以降の持続的成長のような特異な例もある。あれは一体何なのだろう、単なる偶然なのだろうか。

アメリカの社会をよく見てみると、高度な資本主義国家といいながら、存分に非経済的組織を内包している。いわゆるNPOである。アメリカの非営利活動組織の活動資金はGDPの実に10%だが、この中には純然たるボランティア組織から大学などの学校法人までを含む広範な組織がNPOとして定義されている。これらの活動が、あの国の非経済社会を構成していて、それらが創造する社会的ゆとりが営利部門の活動を補償しているらしい。そして、蟻とアリマキの関係のように、企業などの営利部門は、得た利益の多くをNPOの活動資金として寄付する。その額は一年間に実に20兆円にものぼる。ちなみに日本では赤い羽根共同募金まで入れても1、000億円に満たない。生き馬の目を抜くと形容されるアメリカの強欲型資本主義だが、しかし実に巨額の慈善型機構（フィランソピー）が社会全体を下から支えていたことが分かるのである。

こんな事を言うのは他でもない。不況と財政赤字に出口を失っている現状を打破するためには、地域社会の中にどのくらい非営利的組織を完備できるかにかかっているということを主張したいためである。山梨県内には2004年11月現在141のNPO組織ができていて。しかし、その活動の県民総生産に対する比率は百分率で小数点以下の少数であろうと推定される。財政赤字に悩まされる自治体行政、深刻さを増す過疎と高齢化、ITなど技術革新に取り残される人々のデジタルデバイス、緊急を要する環境創造政策などなど、講ずべき施策は山とある。これらに応えるには非営利活動組織の活躍が今喫緊の課題である。

筆者が、「サンデー毎日」の楽しみをもう少し先に延ばしてNPOなどの非営利組織にコミットしようと考えたのは、かくのごとき大それた初夢を描いてのことなのである。